
少年者語

蒼井 憂己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年者語

【Nコード】

N4947N

【作者名】

蒼井 憂己

【あらすじ】

思春期と呼ばれる心境の変化が多い時期、友情・愛情と共に少年達の成長を描いた作品

幸福追求論

僕は幸福論者だ。

理由はない。

例えば、ゲームをする子供に「何でゲームすんの？」って聞いて「面白いから」って返ってくるのと同じ感じ。深い意味はない。ただそれが僕のポリシーが一番合っていると感じる。

それでも僕の求める幸福が僕に訪れたことは一度もない。理由はすごく簡単なこと。

僕に幸せだと感じることはないから。

生まれつき、家庭には恵まれている。母がいて父がいて、妹も二人いる。両親は過保護で自分で言うのもなんだが、大切に育てられてきた。それが僕にとっていいことか悪いことかなんてだれが知るよしもない。

普通に勉強して、普通にかっこつけて、普通に恋愛して、普通に生きてきた。

そんな若造が幸福を語るなんて馬鹿馬鹿しい話だと思つかもしれない。

その通りだ。

僕だってそう思う。

けど、生きるって。

そうゆうことだろ？

まあ僕に

幸福を語る資格は

ないのかも知れないけど。

ジュース

そもそも勉強する意味ってどこに何のためにあるんだ？って最近意味不明無意味なことを考えてたり考えてなかつたりする。まあ、つまり簡単に言えば考えていない。最近考えたことと言えば、こいつ（相田 由姫さん）って塾どこ行ってたっけっていう若干ストーカー染みたことを頭の左端あたりで二秒間ほど考えて超高速で抹消したことぐらいだ。日本語の辻褄があっていないことは、多少見逃していただきたい。何せ僕は生まれてから17年5ヶ月経過するのに高2生活をエンジョイする存在そのものが矛盾しているやつなのだから。意味がわからない？では後に少しづつ僕のミラクルうふふキヤッキヤツ（以下自重）な過去を公開していくとしよう。つまりところ、僕は暇なのだ。どのくらい？って聞かれたら、地球滅亡させてやるうかなくて考えられるくらいって答えたりは決してしないが、そのくらいとりあえず暇なんだ。急に誰が死んでくれないかなってぐらい暇なんだ。

「ねえ、起きてる？寝たとか言ったら怒るよ、うん、本気で。」

「ごめん、死んでる。」

「あらそう、そりゃ邪魔して悪かったわ。おやすみ、永遠に。戻ってくんな。」

この毒舌女の名前が相田由姫。やっぱ親から授かった名前と正反対に子供は育つんだなあって知った。って言ったら怒りながら涙目で殴ってくるんだろなあとか想像して思わず笑ってしまった。

「なに？」

「んや、何でも。」

幼なじみの俺が言うのもなんだがこいつは容姿的な意味で普通に可愛いなあと思う。身長は小さい。が、髪はストレートで少し茶色がかっている。特に手がキレイだなあ、と、僕は思います、はい。いえ、そういう感情はないのでご安心を。僕は身長が少し低めだから、

こいつと居れば小さく見られなくていいな（笑）って思っただけ。

「言い訳がまし過ぎだよな。」

「うえ？」

「だーかーらー、この犯人、見なよこれ！この記事！」

びつくりした。僕の思考を読まれた上に、そこに便乗してコメントしてきたのかと思った。まあ、こいつにそんな能力はないだろうけど。さて、この話は置いて。こいつの言う記事に目をやった。

「無差別殺傷事件：？なんだ、お前。こんな事件に興味あるのか？」

「興味ってか：、だってこの事件、うちの学校の近くじゃない？あたし昨日ニュースでうちの学校の生徒がインタビューみたいなのに答えてるの見たもん。」

「へえ…」

けどこの事件、犯人が捕まってる。21歳大学に通学する一般的な男。けどそいつは犯行を否定している。やっていない、俺はやっていないんだ、と。

「まあ、やってないって言うてんならやってないんじゃないか？」

「あなたの脳ミソ、腐ってんの？んなこと信じるぐらいなら刑事つかーもんは作られないの、わかる？」

「はいはい、お姫様。」

正義の鉄拳一発食らわされた。痛かつ…た、過去形。ここ重要。

「あ。…お邪魔だった？」

何人かの男女が一斉に入ってきた。

あはは、と笑いながら入ってきたのは阿部 良輔。良輔は頭の良さは普通だけど、顔がいい。らしい。まあ、優しくて心が広いやつだな、って感想を抱かれやすいかな。つるみやすいやつだ。

「良輔、野暮なこと聞くなよ。放課後の教室に一組の男女がいたら、な。ほら、わかるだろ？良輔は頭いいもんなあ。」

怪しげな笑みを浮かべながら僕の方を見て、な？って言うてくるこいつは、佐野 尚希。こいつもつるみやすい。他人にはクールなやつだけど、僕と良輔には笑顔を向けてくれる。気を許した相手に対

し、異様なほどからかい癖があるのがどうもなあって感じだけどもこいつ、かつこいいんだ。中身も外表も。だから俺はこいつが好き。いや、変な意味じゃなくて。あとから入ってきたやつは中野（女）と池崎（女）と山崎（男）と谷村（男）だ。良輔と尚希、山崎と谷村がこつちに寄ってきた。

「なんだこの新聞。」

「無差別殺傷事件の記事。」

僕がそう答えると山崎の顔色がちょっと変わった気がした。まあたぶん、僕が今まで目を瞑ってたから目を開けた瞬間、目眩ましにあつたせいでそう見えただけだろうけど。

「お前風紀委員の仕事するって言ってなかったか？ やっぱ二人で何かやってたんだろ。何してたんだ、おい。聞かせろ。」

「尚ちゃん……」

呆れた顔で良輔がため息をついた。とりあえずそれは見なかったふりをして、説明を試みることにした。

「最近、北陵高校付近で無差別殺傷事件、起きてんだってさ。被害者は計8人、そのうち死者が1人。これは傷、浅かったらしい。シヨック死だったって。多分、犯人も死ぬと思わなかったんだろっかね。残り7人は全員、ナイフで怪我を負わされたらしい。かすり傷ほどの小さい危害だったものから、意識を失うほど出血させられるくらい深く刺されたりもあったみたいだね。」ここまで説明して、とりあえず山崎を見てみた。普通に立ってこつちを見ている。うん、やっぱさっきのは錯覚だったんだな。「狙われているのは、全員16歳以下の女だつて、さ。」

「趣味わりいな。」

女子供を狙うつてことにどんなメリットがあるのかは知らないけど、フェミニスト主義の僕には真似できないことだな、って心にもないことを僕の腐った脳ミソで考えた。

「これ、犯人まだ若い人なんじゃない？ まだ十代ぐらいで体が出来上がってないようなちよつと小さい人。かといつても、その辺の女

の子よりは体が大きい高校男子ぐらいの。」

尚希がああ恐ろしい笑みを浮かべて口を開いた。

「この学校のやつなんじゃね？なあ山崎。お前みたいな。」

「尚ちゃん、冗談よしなよ。山崎君みたいな花も大切に扱うような優しい男子高校生はそんなことしないよ。」

「そうだな、ははっ。冗談だよ。さあ帰るぞ風紀委員。ジュースおこれw」

はははっ。

「冗談だろ？」

山崎、

その顔色やめようぜ。

二回目は嘘についても

誤魔化せねえんだから。

冗談だから。

そんな顔色悪くすんなよ。

頼むよ。

「二回目は冗談は言わねえもんだよ、風紀委員。」

なあ、尚希。

お前、やっぱかつこいいよ。ジュースおごるから。そんな冗談やめようぜ？

俺のせめてもの幸福論、
この日常、頼むから
潰さないでくれよ。

なあ

ジューズおごるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4947n/>

少年者語

2010年10月10日19時55分発行